

令和4年度・長崎県立長崎図書館郷土資料センター

企画展示2

郷土の新聞が伝えた近代日本の 対外戦争・原爆

～明治期から現代まで～



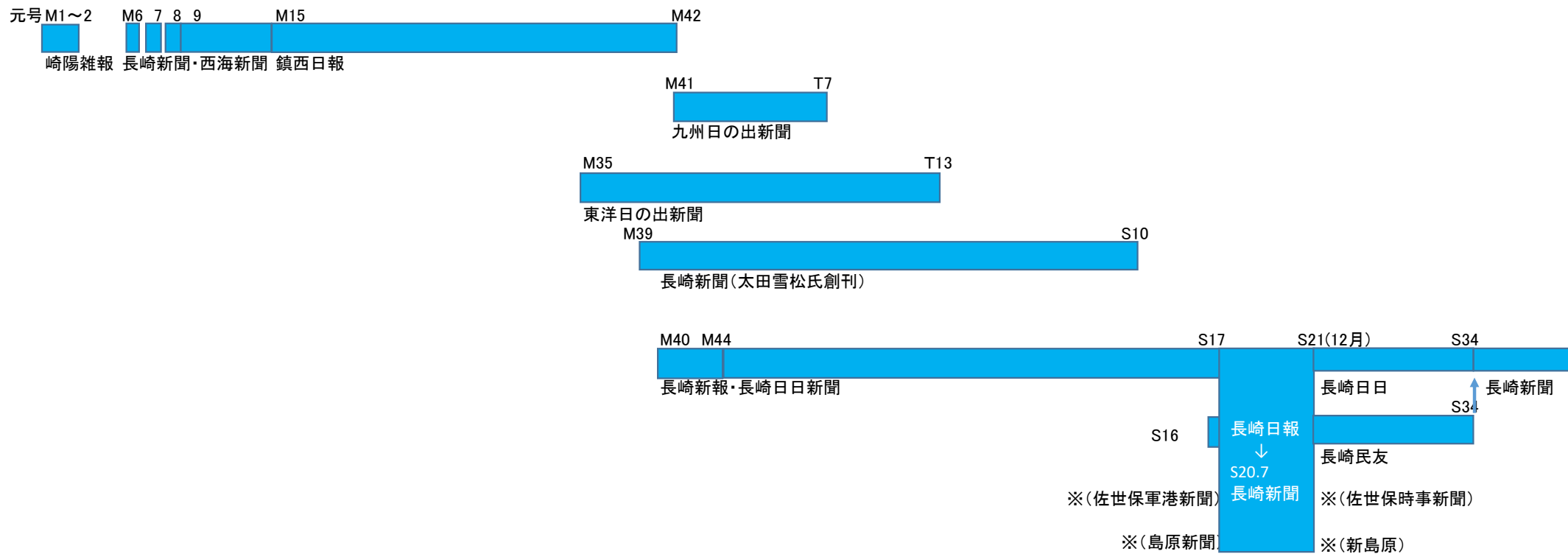
令和4年7月5日（火）～8月28日（日）

明治になって国民皆兵を理念とする徴兵令が施行され、近代国家の常備兵として日本軍が生まれました。日本の軍隊が外国へ派兵されたのは、明治 7(1874)年の台湾出兵を最初として、明治 27(1894)年の日清戦争、明治 37(1904)年日露戦争、大正 3(1914)年第一次世界大戦と、ほぼ 10 年おきに海外への派兵は続きます。さらに昭和 6(1931)年の満州事変以後は十五年戦争とも呼ばれるとおり、昭和 20(1945)年 8 月の原爆投下・無条件降伏まで、常時、戦争の当事国でした。郷土資料センターでは、明治期以後の郷土の新聞を閲覧できます。それぞれの戦争について、郷土紙でどんな報道がなされたか、たどります。

令和 4 年 7 月 5 日
長崎県立長崎図書館
郷土資料センター

近代日本の対外戦争と閲覧可能な長崎の郷土紙（新聞）

元号	明治	大正										昭和								
元	5	10	15	20	25	30	35	40	45/元	5	10	15/元	5	10	15	20	25	30	35	
西暦	1868	1872	1877	1882	1887	1892	1897	1902	1907	1912	1916	1921	1926	1930	1935	1940	1945	1950	1955	1960



※印は所蔵なく閲覧不可



郷土の新聞が伝えた日本の戦争 展示資料（複製）一覧

	見出し	日付・新聞名
1	【日清戦争】特派員派遣ノ社告	明治27(1894)年7月17日付「鎮西日報」
2	【日清戦争】韓廷の局面竟に一変	明治27(1894)年7月24日付「鎮西日報」
3	【日清戦争】日清間艦戦開戦の詳報	明治27(1894)年7月31日付「鎮西日報」
4	【日清戦争】連載小説が全文伏字	明治27(1894)年8月3日付「鎮西日報」
5	【日清戦争】開戦の通知・新聞検閲	明治27(1894)年8月3日付「鎮西日報」
6	【日清戦争】宣戦詔勅・我陸軍の大勝	明治27(1894)年8月4日付「鎮西日報」
7	【日清戦争】勝敗の報は知らしめざる可らず	明治27(1894)年8月8日付「鎮西日報」
8	【日清戦争】我兵破竹の勢いならん/日清艦隊激戦地海洋嶋之図	明治27(1894)年9月22日付「鎮西日報」
9	【日清戦争】日清休戦条約文	明治28(1895)年4月5日付「鎮西日報」
10	【日清戦争】講和条件	明治28(1895)年4月24日付「鎮西日報」
11	【日清戦争】(三国干涉) 詔勅	明治28(1895)年5月16日付「鎮西日報」
12	【日露戦争】(鎮西寄書)必ず開戦せよ	明治36(1903)年7月10日付「鎮西日報」
13	【日露戦争】宣戦前の実戦/中立国内の交戦	明治37(1904)年2月7日付「鎮西日報」
14	【日露戦争】戦時の国民/外交的関係断絶	明治37(1904)年2月9日付「鎮西日報」
15	【日露戦争】長崎其他の戒厳令	明治37(1904)年2月16日付「鎮西日報」
16	【日露戦争】二百三高地占領	明治37(1904)年12月4日付「鎮西日報」
17	【日露戦争】(日本海海戦)敵艦隊全滅	明治38(1905)年5月30日付「鎮西日報」
18	【日露戦争】休戦の決定/講和条件要領	明治38(1905)年9月1日付「鎮西日報」
19	【日露戦争】(講和条件に対する)東京の各新聞	明治38(1905)年9月5日付「鎮西日報」
20	【日露戦争】(講和反対の)市民大会	明治38(1905)年9月12日付「鎮西日報」
21	【日露戦争】(講和に対する)東洋日の出新聞 宣言	明治38(1905)年9月11日付「東洋日の出新聞」
22	【第1次世界大戦】日独国交断絶	大正 3(1914)年8月24日付「東洋日の出新聞」
23	【第1次世界大戦】対支那談判(対華21か条要求)	大正 4(1915)年2月21日付「東洋日の出新聞」
24	【第1次世界大戦】外交研究会合(対華21か条要求)	大正 4(1915)年5月12日付「東洋日の出新聞」
25	【第1次世界大戦】今日平和デー(戦争終結)	大正 8(1919)年7月1日付「東洋日の出新聞」
26	【満州事変】今回の満鉄線破壊は支那側の計画的行動	昭和6(1931)年9月23日付「長崎新聞」
27	【満州事変】満州国の輝かしい誕生	昭和7(1932)年3月2日付「長崎日日新聞」
28	【日中戦争】“日本軍より突如発砲 支那軍是に応戦せり”(盧溝橋事件)	昭和12(1937)年7月9日付「長崎日日新聞」
29	【日中戦争】(南京陥落)爆発した県民の歓喜	昭和12(1937)年12月14日付「長崎日日新聞」
30	【日中戦争】国民政府を認めず	昭和13(1938)年1月17日付「長崎日日新聞」
31	【二・二六事件】(後藤内相、臨時総理大臣)	昭和11(1936)年2月27日付「長崎日日新聞」
32	【太平洋戦争】宣戦の大詔を拝す/人類の宿敵今ぞ討たる	昭和16(1941)年12月9日付「長崎日日新聞」・「長崎民友新聞」
33	【太平洋戦争】アリューシャン列島を攻略・米空母二隻を撃沈(ミッドウェー海戦)	昭和17(1942)年6月11日付「長崎日報新聞」
34	【太平洋戦争】本土決戦を待つ新兵器 敵来たらば一挙撃砕	昭和20(1945)年7月22日付「長崎新聞」
35	【太平洋戦争】広島市を焼爆攻撃(原爆)	昭和20(1945)年8月7日付「長崎新聞」
36	【太平洋戦争】長崎市に新型爆弾	昭和20(1945)年8月10日付「長崎新聞」
37	【太平洋戦争】偽騙行動で不意打・新型爆弾に戒厳を要す	昭和20(1945)年8月11日付「長崎新聞」
38	【太平洋戦争】恐れるな新型爆弾・勝つ手あり/露出部は全部隠せ・待避に蒲団を被れ	昭和20(1945)年8月11日付「長崎新聞」
39	【太平洋戦争】防げるぞ新型爆弾 戦訓いかす『心得十六項目』/長崎要塞司令部許可済み(写真)	昭和20(1945)年8月13日付「長崎新聞」
40	【太平洋戦争】大東亜戦争終結の聖断降る	昭和20(1945)年8月15日付「西日本新聞」
41	【戦後】一瞬吹飛ぶ広島城 死傷者二十万を超ゆ	昭和20(1945)年8月23日付「長崎新聞」
42	【戦後】原子爆弾一ヶ月後の現地	昭和20(1945)年9月15日付「長崎新聞」
43	【戦後】健康者が続々死ぬ 恐怖の第三群症状	昭和20(1945)年9月16日付「長崎新聞」
44	【戦後】一枚の新聞に描くわが生活の再設計	昭和20(1945)年9月21日付「長崎新聞」
45	【戦後】絢爛偲ぶ奉納踊り 長崎復興は先づ諏訪社頭から	昭和20(1945)年10月8日付「長崎新聞」
46	【原爆の日】特集	令和2(2020)年8月9日付「長崎新聞」
47	【原爆の日】特集(英団体「D&ADアワーズ2022」金賞受賞広告)	令和3(2021)年8月9日付「長崎新聞」



【日清戦争】特派員派遣ノ社告

明治27(1894)年7月17日付「鎮西日報」

日清戦争は(明治27年~28年)は朝鮮の清国からの独立を目指して、朝鮮半島および中国の遼東半島を戦場にして、日清両国が戦った戦争。勃発する前に、長崎の郷土紙「鎮西日報」は「迅速且ツ确实ニ報道スルノ必要ヲ認メ」独自に特派員を朝鮮国へ派遣した。

鎮西日報 明治二十七年七月三十一日 第九千七百六十九號

○清國政府開戦ヲ布告ス
 (廿八日午後七時東京特派員電報) 清國政府は念々開戦ヲ布告ス

○我カ政府ニ未ダ發布セザレズ
 清國政府は先ず我國領土上ニ事起リ我軍出陣して清國領土ニ侵入スルとして之ヲ法裁スルも亦清國領土ニ侵入スル事ナシ

○閔族の流刑
 (廿九日午後一時) 閔族の流刑(二十三日午後一時) 朝鮮國の國族、統に流刑ニ處セらる

○朝鮮國王、清國政府への照會
 朝鮮國王陛下は清國政府に向て朝鮮に於ける清兵の撤回を求め若し清國政府が於て承諾セザル時は日本兵力を以て撤回すべき旨照會せらるる由

○政務局長、主税局長の轉補
 (廿九日午後二時) 政務局長加藤高明氏は政務局長に轉任し其後任は日置田種太郎氏主税局長加藤高明氏は主税局長に轉任す

●日清艦隊開戦の詳報
 廿五日生野艦隊は五時以て日清艦隊の戦況は既に前報に於て詳述せり然るに廿六日及び廿七日の消息は本報に於て詳述せり然るに廿七日の消息は本報に於て詳述せり然るに廿七日の消息は本報に於て詳述せり

此の新聞記事は、日清戦争の進展を詳細に報じている。記事は、清國政府の宣戦布告、日本の対応、そして海軍作戦の経過について述べている。また、政府の人事異動についても報じている。

【日清戦争】日清間艦戦開戦の詳報

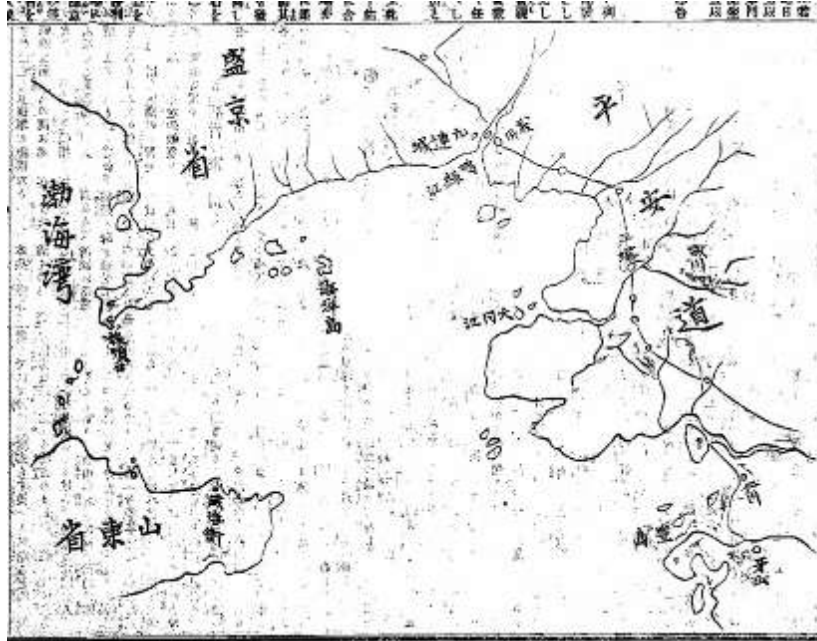
明治27(1894)年7月31日付「鎮西日報」

戦況を伝える内容の大半は組版したあと伏字となり、漢字部分に振られているふりがなのみが残る。

【日清戦争】我兵破竹の勢ならん/日清艦隊激戦地海洋嶋之図

明治27(1894)年9月22日付「鎮西日報」

上段の社説で、「我は韓国と同盟し、彼清国を討てり、故を以て韓の危は則ち我の患たり」という理由で開戦し、初戦大勝の勢いのまま、冬前には北京を占領し、平和を回復して日本の勇武を後世に残すことを希望するという。下の地図は9月17日に激戦となった黄海海戦の現場で、このあと海域の制海権を日本が握った。



此圖は九月十七日海戦の激戦地海洋嶋之図を示し、我軍の優勢を表現している。図には、日本艦隊の進軍ルートと清軍の防線が示されている。

●支那人居留地 焼拂
 支那人居留地は、我軍の進軍に伴って焼燬された。これは、清國の抵抗を弱体化させるための作戦の一環として行われた。

【日露戦争】(鎮西寄書)必ず開戦せよ

明治36(1903)年7月10日付「鎮西日報」

日露開戦にあたり、主戦論者であった法学博士戸水寛人(帝国大学法科大学教授、現在:東京大学法学部)の寄稿を掲載。議論の可否は記者の責ではないとしながらも、「尊敬すべき学者の時論として読者に紹介する」という。

必ず開戦せよ

法学博士 戸水寛人
日露開戦の必要は、日本とロシアの間に、何等かの原因で、戦争が起るに、必ずしも、日本が先手である必要はない。...

日露開戦の必要は、日本とロシアの間に、何等かの原因で、戦争が起るに、必ずしも、日本が先手である必要はない。...

【日露戦争】(日本海海戦)敵艦隊全滅

明治38(1905)年5月30日付「鎮西日報」

5月27日対馬沖、北上してきたバルチック艦隊を佐世保から出撃した日本海軍が迎え戦った。全面を使い海戦の経過を詳報した。

【日露戦争】(講和反対の)市民大会

明治38(1905)年9月12日付「鎮西日報」

ポーツマス条約に対する反対運動は、9月5日東京で日比谷焼打事件を起こすが、長崎でも長崎新報・九州日の出新聞社・長崎新聞社・鎮西日報の新聞四社が主催して講和反対の市民大会を開催した。参加者は4500名に達した。

海軍萬歳
東郷聯合艦隊司令長官の公報に曰く
廿七日我艦隊は敵艦隊と激戦し多少の効果
を収め敵艦隊二隻巡洋艦三隻を撃沈し我艦
隊の損害は最も少くなし
日没より水雷を放つて夜襲を為す
廿八日我艦隊は追撃を續行し敵巡洋艦三隻巡
洋艦防衛艦等より成る敵艦隊に對し猛烈な
る砲撃を加共四艘は降伏し我艦隊損害なし
此敵艦の旗旗と砲艦と機雷チボクトフ以下
三隻を捕獲せし敵艦は左の如し
海防艦 二
特務艦 二
海防艦 一
特務艦 一
又捕獲艦は左の如し
海防艦 二
特務艦 一
於此敵の士氣は全滅したる

市民大会
今回の講和は千古の
屈辱なり爰に我市民
一同の意見を發表す
る爲め市民大會を開
かんとする市民奮つ
て賛同來會あれ
日時
本日午後一時
場所
新大工町舞鶴座
有志の寄附
發起者
長崎新聞社
九州日の出新聞社
鎮西日報社
長崎新聞社

東洋日の出新聞

宣言!!

東洋日の出新聞は、非講和大会と云ふ者に反対です。
反對の理由は、既に幾回かの
証言を一貫して終始論を
如く、我々は對露開戦の主
者たるに同時に、平和克復の
許願者なり主唱者なりで、此
上に忠勇の將士卒を殺さしめ
る事は日露共に無用且つ有害
と議り、戦争が天命なりしと
同じく此際平和も亦天命なり
と確信し、講和條件は容認
も得る者ぞ論議し、非講和を
各として世道人心を案する者
の責を惜むべからず
其社は非講和市民大會の名義
は不當と思ひます。四新聞の
聯合が代表する非講和よりも
我社一獨が代表する平和條約
承認者が幾十倍の多數たる
事實を認めます。
平和克復の大規模は迫り市民
大會に於て開催す可きに付、
今に於て、標榜者として市民の調
和を缺くは不智なりと考へま
す。因て我々は反對ながら之
を事前に攻撃する事は致しま
せぬ。其に心ある市民諸君は
附和出席せざる様望みます。
非講和を公認決議する方は、
重大なる責任を御承知ある可
し我々は安んじ人を死なしたる
事に反対です

【日露戦争】(講和に対する)東洋日の出新聞 宣言 明治38(1905)年9月11日付「東洋日の出新聞」

全国の多くの新聞各社が講和反対の論戦を張る中、県内では唯一、東洋日の出新聞のみ講和条約に賛成の立場を表明した。「非講和大会と云ふ者に反対です。・・此上に忠勇の將士卒を殺さしめる事は日露共に無用且つ有害」といい、これ以上の戦争被害を避けるために講和が必要との立場である。



【第1次世界大戦】日独国交断絶
大正 3(1914)年8月24日付「東洋日の出新聞」
大正 3(1914)年7月に欧州で始まった戦争に、日本は日英同盟を理由にドイツに対し宣戦布告して参戦した。陸海軍ともに、予定の行動を執ったというが、行軍の詳細については事前の検閲で伏字だらけとなり伝えられない。

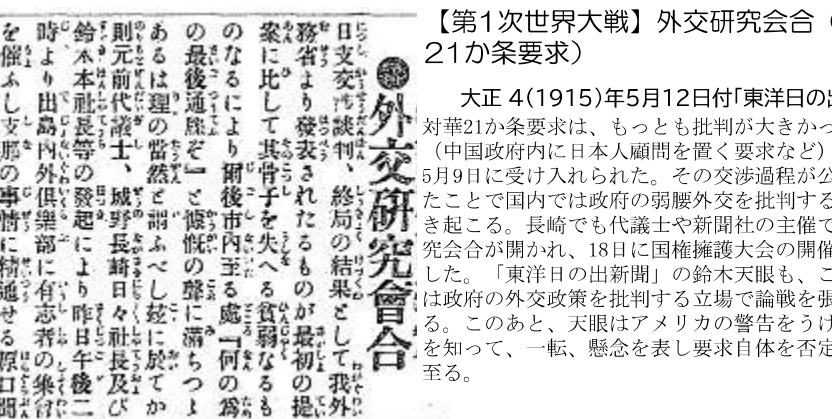
【第1次世界大戦】対支那談判（対華21か条要求）

大正 4(1915)年2月21日付「東洋日の出新聞」
第1次世界大戦に参戦した日本は翌大正5年1月18日に中国袁世凱政府に対して21か条にわたる要求を突き付けた（対華21か条要求）。要求の内容は他国に対して秘密にすべきとし、国内でも詳細な報道はなされないまま、交渉は難航した。中国は各国に内容を公表し、日本との交渉を有利にしようとした。日本は、このあと要求内容を変更し、5月7日に中国へ最後通牒を突き付けた。



【第1次世界大戦】外交研究会合（対華21か条要求）

大正 4(1915)年5月12日付「東洋日の出新聞」
対華21か条要求は、もともと批判が大きかった内容（中国政府内に日本人顧問を置く要求など）を除き5月9日に受け入れられた。その交渉過程が公表されたことで国内では政府の弱腰外交を批判する声が高まり、長崎でも代議士や新聞社の主催で外交研究会合が開かれ、18日に国権擁護大会の開催が決定した。「東洋日の出新聞」の鈴木天眼も、このときは政府の外交政策を批判する立場で論戦を張っている。このあと、天眼はアメリカの警告をうけたことを知って、一転、懸念を表し要求自体を否定するに至る。



【第 1 次世界大戦】今日平和デー（戦争終結）
大正 8(1919)年7月1日付「東洋日の出新聞」
パリのベルサイユ宮殿での会議の結果、6月28日に講和条約が締結された。戦争終結を受けて、長崎においても大祝賀会が催された。



【満州事変】 今回の満鉄線破壊は支那側の計画的行動

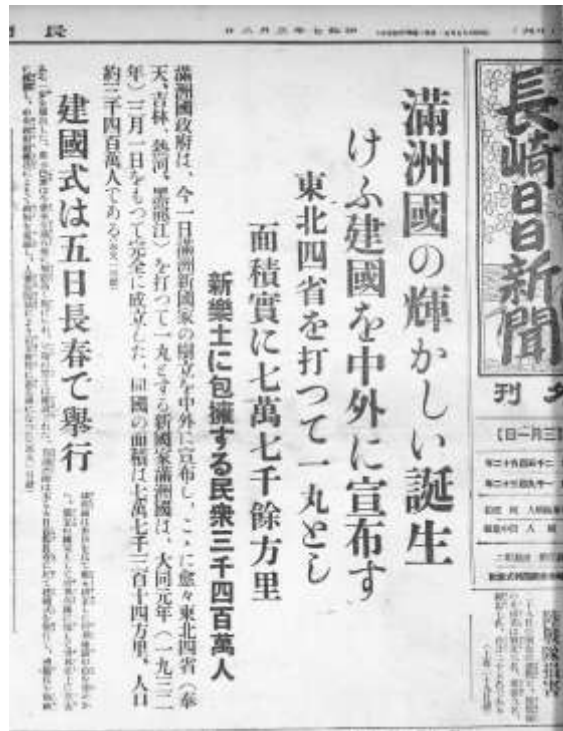
昭和6(1931)年9月23日付「長崎新聞」

昭和6年9月18日、中国東北部（満州）奉天近郊の柳条湖で満州鉄道の線路が爆破される事件が起こった。爆破したのは中国兵だとして、それに対して日本の守備隊が反撃したことが満州事変の始まりとなった。この柳条湖事件を起こしたのは中国兵ではなく、日本の関東軍であったことは、昭和20年に戦争が終わったあとに明らかになる。

【満州事変】 満州国の輝かしい誕生

昭和7(1932)年3月2日付「長崎日日新聞」

前年9月の柳条湖事件に始まる満州事変の結果、昭和7年3月1日に日本軍が展開した地域に満州国が誕生した。中国清朝の最後の皇帝であった愛新覚羅溥儀を執政に迎えた新しい国家は、日本軍の意向を反映した政権であった。侵略した地域に自国に親しい政権を樹立して、自国の勢力範囲とする行動はその後も繰り返されている。



【日中戦争】（南京陥落）爆発した県民の歡喜

昭和12(1937)年12月14日付「長崎日日新聞」

12月13日、国民政府の本拠地南京を攻略した知らせが長崎にも伝わった。その時の長崎県民の様子。県下一齊に提灯行列等が舉行され、歡喜に包まれた。祝賀の花電車、諏訪神社での祝賀会などの写真掲載。



【太平洋戦争】宣戦の大詔を拝す

昭和16(1941)年12月9日付「長崎日日新聞」

昭和16年12月8日、日本はアメリカ・ハワイの真珠湾を攻撃して連合国側へ宣戦布告した。真珠湾攻撃の第1報の記事。以後、戦局の報道は、ほとんど大本営発表がそのまま報道される。

【太平洋戦争】長崎市に新型爆弾

昭和20(1945)年8月10日付「長崎新聞」

8月9日14時45分の西部軍区司令部発表として、長崎市への原爆投下についての最初の報道は、「詳細目下調査中なるも被害は比較的僅少の見込み」という内容である。この発表は、当時立山防空壕（当郷土資料センターに隣接）で執務していた知事からの第一報に基づいている。原爆投下の翌日に新聞が発行できたのは、西日本新聞と提携して代行印刷・発行を委託していたためで、当日の西日本新聞も題字が変わるだけで全く同じ紙面で発行されている。一面のトップ記事は8月9日17時大本営発表のソ連参戦の記事である。



【太平洋戦争】防げるぞ新型爆弾 戦訓いかす『心得十六項目』/長崎要塞司令部許可済み(写真)

昭和20(1945)年8月13日付「長崎新聞」

防空総本部関係者が被災地に出張研究の結果として新型爆弾に対する16項目の対策を発表した。なかには「七、軍服程度の衣類を着用して居れば火傷の心配はない、防空頭巾、手袋を併用すれば頭、顔、手を完全に護ることが出来る」など、このあとに明らかになる被害の実相とはかけ離れている内容も含まれる。写真は長崎要塞司令部許可済みで、「②焼跡を視察する永野知事」などの説明があるので、場所は特定できないが原爆被災地の写真だと考えられる。



原子爆弾 一ヶ月後の現地

被爆者続々と死亡 絶えぬ街の火葬

町の試煉に起つ聖教徒



一瞬にして廃墟と化した浦上天主堂—無残にもちぎれ飛んだ聖像の首—
—この惨状をみれば死にたい

被爆者続々と死亡 絶えぬ街の火葬

記念物として 天主堂を保存

—聖教徒一萬が犠牲

縣教育の指針を探る

半日は増産に捧ぐ

—教員生活の中心に取組む

疎開児童は居られ

一三三部教授へ 今明日には開始

教職員も一應準備

基盤は一貫不動

甲學を主に、心身健康の刷新へ

—即第一加形式教育の刷新へ

道きむ進の教文建再

—建設を信所 官大部文村入

基盤は一貫不動

道きむ進の教文建再

所在を知らせよ

—即第一加形式教育の刷新へ

通知御轉移
安社務務一記下務業務務信當
館館第 町御天市岡福
地古女加福行業業本日
店支岡福券證興日



太閤記

—新刊英治

西学院中學校

—新刊英治

所在を知らせよ

【戦後】原子爆弾一ヶ月後の現地

昭和 20(1945)年 9月 15日付「長崎新聞」

写真には「一瞬にして廃墟と化した浦上天主堂—無残にもちぎれ飛んだ聖像の首—」との説明あり。「被爆者続々と死亡 絶えぬ街の火葬」の見出しに被爆後の実相が端的に表現されている。下の「記念物として天主堂を保存」の見出しで、被爆1ヶ月後には浦上天主堂の保存に関する議論があったことを伝えている。